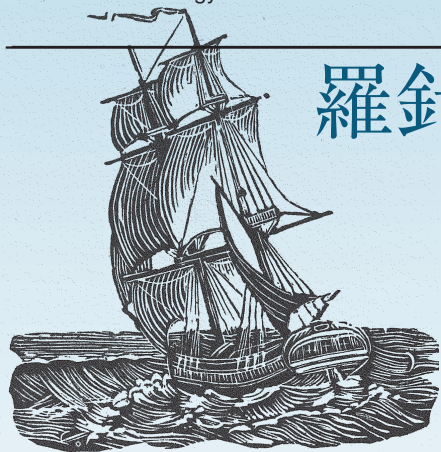




羅針盤

映画『The Matrix Reloaded』を意識して
写真を撮ったつもりが
「Mr. Oaric」にしか見えない
筆者近影



山崎 研志
Kenshi Yamasaki

東北大学医学部皮膚科臨床教授

The 酒皸 : reloaded

2013年に企画を開始して2014年に発行した本『Visual Dermatology』誌の酒皸特集「The 酒皸」からはほぼ10年の月日が経過しました。この10年の間に、海外では酒皸の治療薬が複数上市され、治療方法の選択肢が増えています。治験を含む臨床研究成果が増えるに伴い、海外では酒皸治療のガイドラインやエキスパートオピニオンによる推奨も数年ごとに改訂され、酒皸治療の考え方やアプローチも変化してきています。

酒皸は主たる症候を基準に4つの病型・サブタイプ；紅斑血管拡張型、丘疹膿疱型、瘤腫・鼻瘤型、眼型、に大別されます。病型・サブタイプ別治療として、2013～2017年にかけて紅斑血管拡張型酒皸に対する治療薬が欧米で製造販売承認を受けました。病型別治療方法の充実に呼応して、2017年に酒皸エキスパート達によるROSCO (ROSacea COncensus panel) は病型別酒皸治療推奨を発表しました。2019年にはROSCOは病型別治療推奨からさらに発展して、持続性紅斑、血管拡張、一過性潮紅、丘疹・膿疱、鼻瘤などの症候・フェノタイプ別の治療推奨を発表しております。酒皸の症候は各病型に大なり小なり混在しており、病型・サブタイプで患者を分類するだけでは十分な治療効果を得られず、酒皸患者の満足度が必ずしも高くないことがこの変遷の背景にあります。

このように「酒皸」という病名から患者治療を考える

のではなく、「酒皸病型・サブタイプ別の治療」、さらには「酒皸症候・フェノタイプ別治療」を考えることによって、患者個別のアプローチを深化させるようとする考え方が最近の10年間で広がってきております。

酒皸標準治療薬のメトロニダゾール外用薬が、2022年に日本でも酒皸に適応拡大されました。この機会に酒皸特集の打診を受け、日本での酒皸治療を見直すという意義を込めて「The 酒皸 : reloaded」の特集を企画しました。「The 酒皸 : reloaded」では、酒皸診断から剤形別の酒皸治療薬を整理するとともに、適当な保険適用薬がない「赤ら顔、紅斑血管拡張型酒皸」に対するアプローチや、酒皸患者の心身症のアプローチや漢方薬など全人的アプローチについてエキスパートの先生方の考え方を共有いただく企画を組んでおります。また、コロナ禍のマスク生活での肌トラブルとしてのいわゆる「マスク皮膚炎」について原因・病態別に執筆いただきました。本書が酒皸の日常診療でふと悩んだときに手に取れる参考書にさせていただき、さらなる日本での酒皸診療の発展に寄与できれば幸甚に思います。

最後になりましたが、執筆いただきました諸先生方、また本特集の発案・アドバイスをいただきました編集委員の諸先生方、そして編集いただいた株式会社 Gakken Visual Dermatology 編集担当の皆様に深謝いたします。